

## これからの心斎橋と大阪の《きもの文化》

〈きもの〉は〈着る物〉、つまり日常着を意味する語から派生した言葉です。しかし、現代のきものは日常着ではなく、七五三・成人式・卒業式・結婚式など、人生の節目とされる時に着る式服へと姿を変え、また「誂える」よりも「借りる」ものへと変化してきました。加えてきものをつくる専門家の減少なども目立っています。浴衣などの季節製品は洋服と同じ感覚で、その年に流行するデザインのものを国外で大量生産して輸入し消費するようになって久しい状況です。こうした時代の流れも《きもの文化》の衰退に追い打ちをかけているように感じられます。

心斎橋は江戸時代以来、大阪の《きもの文化》を支えてきた〈呉服のまち〉であり〈きものまち〉でした。しかし、近年では、心斎橋筋やその周辺エリアから呉服商や関連業種がすっかり姿を消してしまいました。いま、我々は心斎橋の変化や大阪の《きもの文化》のこれからについて、真剣に考えて行くべき岐路に立たされているのです。「最近、心斎橋へ行っていない」という方々には是非この機会に足を運んでいただき、心斎橋と大阪の《きもの文化》のこれまでとこれからについて思いをめぐらせていただければ幸いです。

### 《ミニ講座と座談会》

#### — 観て 聴いて 考える — 心斎橋ときもの これまでとこれから

〈心斎橋〉に深い関心を持つ研究者や小大丸の関係者をお招きして〈きもの〉の《これまで》と《これから》について考えるミニ講座と座談会を開催します。

【日 時】 令和6年(2024)11月24日(日)  
午後1時30分～4時(午後1時より受付開始)

【会 場】 大阪歴史博物館 4階 講堂

【定 員】 200名(インターネットによる事前申込、先着順)

【参加費】 1,000円 席に余裕がある場合には、当日受付を行います。  
当日受付の参加費は1,200円です。

※ 詳細は当館HPにてご確認ください。

### 展示解説

担当学芸員が展示内容や作品の見どころについて、ご案内します。

【日 時】 令和6年11月2日(土)  
午後2時より30分程度

【講 師】 中野朋子(当館学芸員)

【会 場】 大阪歴史博物館 8階 特集展示室

【参加費】 無料(ただし、入場には  
常設展示観覧券が必要です)

【参加方法】 当日直接会場へお越し下さい。

### 特集展示 心斎橋ときもの —小大丸 260年のあゆみ—

会 期：令和6年(2024)10月30日(水)から12月23日(月)

会 場：大阪歴史博物館 8階 特集展示室(常設展示場内)

主 催：大阪歴史博物館

協 力：株式会社 小大丸・株式会社 小大丸ビル

展示担当 中野朋子

開館時間：午前9時30分～午後5時  
※入館は閉館の30分前まで

休 館 日：毎週火曜日  
常設展示観覧料でご覧になれます。

観 覧 料：大人600円(540円)  
高校生・大学生400円(360円)

※( )内は20名以上の団体割引料金

※中学生以下・大阪市内在住の65歳以上(要証明証提示)の方、  
障がい者手帳等をお持ちの方(介護者1名を含む)は無料







## 江戸から明治へ 一大阪の衣生活と小大丸一

令和 6 年（2024）3 月、今年で創業 260 年を迎えた大阪の呉服商・小大丸が心齋橋二丁目の店舗を閉じました。大阪に暮らす人々にとって当たり前だった「小大丸さん」の灯が心齋橋筋から消えたのです。

小大丸は、初代の和屋忠三郎が宝暦年間（1751～1764）に大和国郡山から来阪し、明和元年（1764）に高津五右衛門町（現在の大阪府中央区道頓堀 1 丁目）で古着商を創業したことにはじまります。ちょうど十代将軍徳川家治の治世のことでした。当時の大阪は京都とならぶ「着倒れ」のまちで、衣服への関心も強かったのです。そうした背景をもとに商業的な成功を取めた和屋は、天明 5 年（1785）には心齋橋筋の菊屋町へと進出しました。文政 10 年（1827）には古着商から呉服・太物商へと本格的に転換し、次第に町の有力者となっていったのです。

明治時代になると、明治維新で一時的に落ち込んだ経済も次第に回復し、大阪はふたたび商都としての姿を取り戻していきます。戎橋は明治 11 年（1878）に鉄橋に架け替えられましたが、戎橋の北にのびる心齋橋筋は明治 20 年代までは江戸時代の雰囲気を残す家並みであったといいます。こののち、明治 36 年（1903）の第五回内国勸業博覧会開催などを経て、大阪は「東洋のマンチェスター」とも称されるようになりました。そして、大正 14 年（1925）の第二次市域拡張によって、人口・面積などで当時の東京市を上回り、日本一の大都市・大大阪と呼ばれるようになった大阪の衣生活は、より一層華やかなものとなりました。



昭和 10 年（1935）の小大丸店頭（左）と店頭提灯（右）ともに「写真心齋橋」（大阪歴史博物館蔵、柴垣和夫氏寄贈）所収



### 小大丸の商標

和屋白井呉服店の商標は「白に井桁」と「大に○」。「白に井桁」は「白井」を、「大に○」は「大和屋」を意匠化したものです。大和屋のすぐ近くには大文字屋（現在の丸）が店舗を構えており、その商標も「大に○」でした。しかし、ふたつを比べてみると大和屋の商標のほうがやや小さいものであったため、「小さい丸」から「小大丸」と呼ばれるようになったといいます。大和屋が「小大丸」の呼称を正式に屋号としたのは、明治 32 年（1899）のことでした。

◇ 大 小大丸

綴織広帯（株式会社 小大丸蔵）より



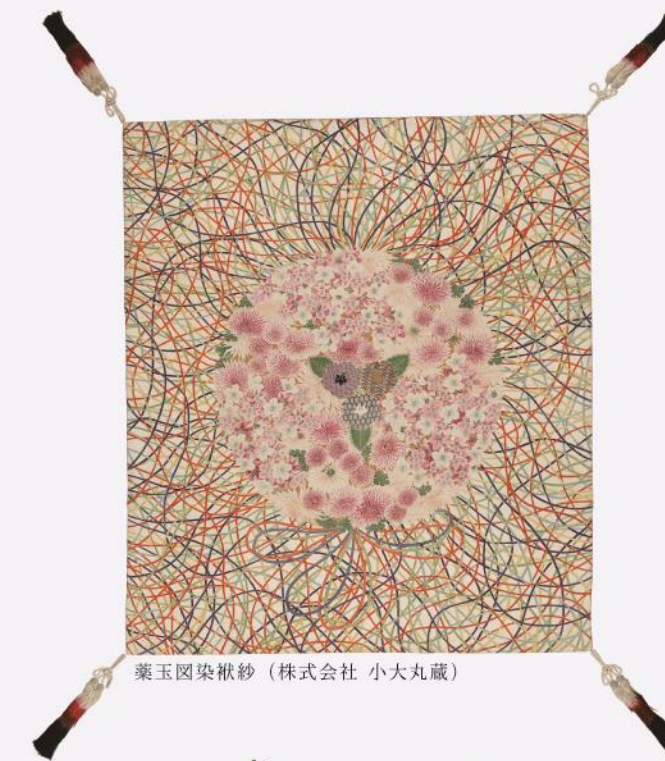
## 洗練された〈大阪趣味〉を発信した小大丸

戦前までの大阪のきもの文化は関西情緒や洗練された〈大阪趣味〉を呈するものと評され、東京とはまったく異なる趣きを持っているものでした。その様子をあらわす言葉として〈粋〉〈はんなり〉〈こうと〉という3つが残されています。〈粋〉は趣味に通じたあか抜けした状態、〈はんなり〉は華やぎに富んだ様子、〈こうと〉（公道・好頭）は〈派手〉の逆で質素ではあるものの、着る人が醸し出す美しく上品な印象のことを意味します。

明治後期から戦前期までに小大丸が扱った作品をみると、大胆ながらも優れた図案の構成と絶妙な色づかいによって見事に大阪好みに仕上げていることがわかります。かつての大阪のきものは〈こうと〉ななかにも〈はんなり〉とした美しさと〈粋〉な風情が感じられる、洗練された〈大阪趣味〉のものでした。



鶴図染振袖（株式会社 小大丸蔵）



薬玉図染袷紗（株式会社 小大丸蔵）



紅白梅図染振袖（株式会社 小大丸蔵）



鶴亀図染袷紗（株式会社 小大丸蔵）より